

津波防災の日を知っていますか？

11月5日は「津波防災の日」でした。2011年に「津波対策の推進に関する法律」が制定され、津波対策を効果的に知ってもらえるよう、さまざまな活動が行われてきました。11月5日にした理由は安政南海地震（1854年）に関係していることを皆さん知っていますか。この日を機会に、あらためて地震や津波への対策を皆で確認しましょう。

【稲むらの火】

「稲むらの火」の原作は、ラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が明治30（1897）年に発表した短編小説「A Living God」（生き神様）です。明治29年に発生した明治三陸地震による津波で数多くの命が失われたというニュースを知ったハーンは、伝え聞いていた安政南海地震がおきた際の濱口梧陵の偉業をヒントに、この小説を書き上げたと言われています。



【あらすじ】

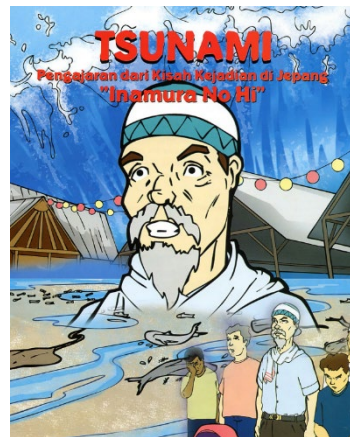
高台に住む庄屋の五兵衛は長くゆったりとした地震の後、家から出て村を見下ろした。しかし、村人は豊年を祝う祭りの準備で地震には気付いていない様子だ。五兵衛が目を海にやると、潮が引き、広い砂原や岩底が現れている。津波がやって来るに違いないと直感した五兵衛は、自分の畑に積んであった取り入れたばかりの稲むらに次々と松明で火を放った。

すると、火に気付いた村人が火を消そうと高台に次々と駆けつけた。村人が五兵衛のもとに集まると、津波が村を襲い、村は跡形もなくなってしまう。その様子を見た村人は、五兵衛が稲むらに放った火によって命が救われたことに気付くのであった。

【稲むらの火の影響】

話のモデルになった濱口梧陵は、和歌山県の広村の住民の生活再建に貢献し、津波の被害を防ぐため堤防も築きました。その88年後の昭和21（1946）年、紀伊半島沖を震源とするマグニチュード8.0の昭和南海地震が発生します。

広村には高さ4mの津波が襲いましたが、居住地区の大部分は堤防によって守られ、被害は最小限に抑えられました。いまではこのエピソードが英語をはじめ、津波被害を受けやすいアジア各国の言語で世界に紹介されています。



「世界津波の日」2024 高校生サミット in 熊本 の活動報告も興味深いです！

<https://tsunamisummit2024.pref.kumamoto.jp/>

10・11月の活動報告

○10月22日【タイ姉妹校・チェンマイクリスチャン学校への寄付】

タイ北部のチェンマイでは、モンスーンの大雨の影響で市内を流れるピン川の水位が上昇して、大規模な洪水が発生しました。姉妹校の校舎も被害があり、UNESCO 部から10月の支援募金より15,000円を寄付しました。（寄付、現地の復旧作業の様子を写真掲載）



姉妹校の皆さん、チェンマイに住む方々の安心・安全が守られるようお祈りします。
皆さんからの募金のご協力にも感謝いたします！



○10月25日、11月8日

【京都YWCA・同志社女子中高合同ワークショップ】

2学期は平安女学院中高を会場にして、ジェンダーに関するワークショップに参加しました。同じ女子校に通う生徒たちは、「〇〇らしさ」の偏見や心の性の話を真剣に考えることができました。

○11月9日【創立150周年 平安女学院秋まつり 参加】

UNESCO部の中高生たちも参加し、地域の皆さんと交流することができました。

12月は11円募金と被災した地域（気仙沼・能登方面）に向けて手紙を書き、寄付を送る予定です。

誰でも参加できますので、参加したい生徒は顧問（佐藤・濱田・小畑）までお知らせください！

△お天気にも恵まれ、多くの来場者に来ていただきました。

